

<b>Title</b>	フランス大都市の布置構造と「郊外」の位置：リヨン市 郊外と中心市街地の変容
<b>Author</b>	川野, 英二
<b>Citation</b>	人文研究. 68 卷, p.81-94.
<b>Issue Date</b>	2017-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	津川廣行教授：中川眞教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

# フランス大都市の布置構造と「郊外」の位置： リヨン市郊外と中心市街地の変容

川野 英二

## 1 はじめに —— 都市布置構造の分析と都市社会政策

社会は諸個人間の相互依存ネットワークであり、社会学の対象がこの相互依存の「関係」の構造にあるならば、都市における「布置構造 (configuration)」の分析は、個々の地区や個人そのものではなく、それらの相互依存の関係を分析することにある。ノルベルト・エリアスらの研究では、近隣地区住民同士の関係に焦点を当てていたが、その理論的関心は、個人や特定の近隣地区の関係を全体社会としてトータルに捉える布置構造の分析であった (Elias, 1965=2009)。都市の発展もまた、相互依存の網の目のなかに位置する住民たちとその居住地区、そして都市社会全体との関係の変容のプロセスでもある。

フランスの都市において特徴的なことは、とくに 1980 年代から全国レベルで実施された「都市社会政策 (politique de la ville)」という特定の行政的介入が大きな役割を果たしている点である。オイルショックの影響による景気後退ののち、フランスでは都市政策の社会政策化が進むようになった。本稿では、リヨンの都市布置構造の分析の予備的な作業として、この都市社会政策が導入されるなかで郊外と都市の布置構造がどのように変化したのかを考察する。

## 2 リヨン郊外の発展

### リヨンの絹織物産業と都市発展

リヨンの絹織物産業は、16 世紀以来、現在の旧市街地ヴェー・リヨン (Vieux Lyon) の南に位置するサン・ジョルジュ (Saint George) 地区が中心であった。1801 年にバンチカードを利用した生産性の高いジャッカル機が開発されると、機械を設置するために高い天井が必要だったため、クロワ・ルス (Croix-Rousse) の丘に絹織物工房が移転していく。クロワ・ルスで働く職人は「カヌ (canut)」と呼ばれたが、独立自営であったかれらの労働条件は非常に厳しいもので、昼夜働いても採算をとることが難しかった。かれらは 1831 年と 1834 年には、産業革命期の大規模な労働者蜂起のひとつである「カヌの反乱 (Révolte des canuts)」を起こした (Rude, 2001)。この反乱が暴力的に鎮圧されたあと、労働者の集中を避けるため

絹織物工場は他地域へと分散していくようになる (Foret, 2010a:5)。その後、1855年の寄生虫による蚕飼育への打撃、合成繊維の登場、また他国での絹織物産業の発展などの影響によって、リヨンの絹織物産業は19世紀後半には衰退に向かっていった。

しかし19世紀の終わりに機械化が進み、新たにコストの低い人造絹糸(レーヨン)が開発されると、リヨンの絹織物産業は再び活発になる。カヌの反乱当時クロワ・ルスに移り染物工場を構え、その後巨大なファミリー企業として成長していたジレ家は、20世紀前半に大規模なレーヨン生産工場をヴォー・アン・ヴラン (Vaulx-en-Velin) に建設し、この地域を工業地域へと変貌させることになる (Foret, 2010a:5-6)。

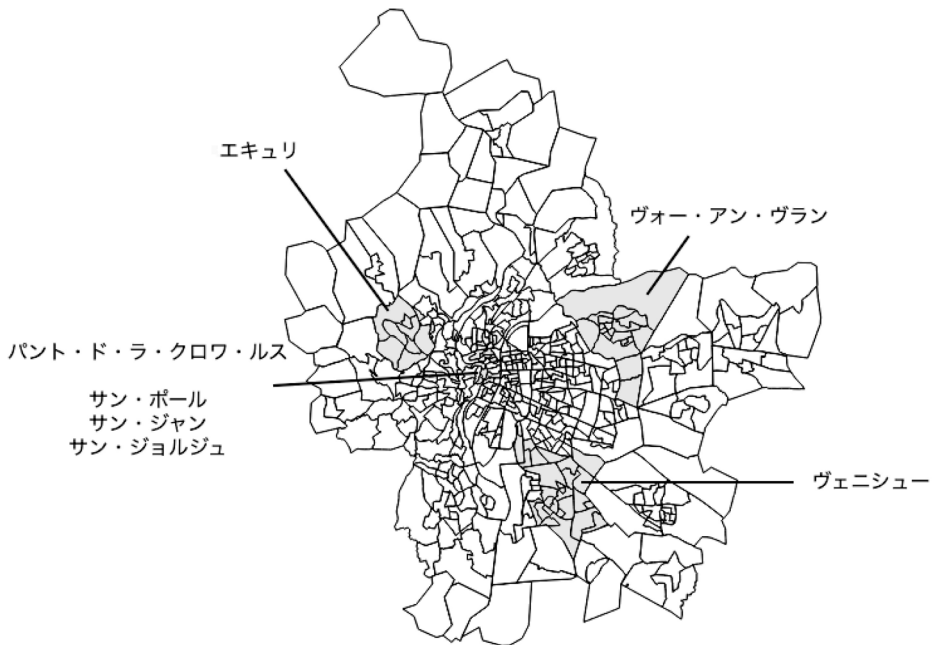


図1 リヨン大都市圏地図

### 郊外の発展——農村地域から工業都市へ

ヴォー・アン・ヴランはリヨン北東部に位置し、現在の人口は約4万人である。東西に流れるローヌ河の南に位置し、そのさらに南に、市を南北に分断するヨナジュ運河 (le canal de Jonage) を間に挟んでいる。ヴォー・アン・ヴランはソワ (Soie)、ヴィラジュ (Village)、グラピニエル (Grappinière)、グラン・マ (Grand Mas)、サントル・ヴィル (Centre Ville)、カルティエ・エスト (Quartier Est)、カルティエ・スド (Quartier Sud) と大きく8つの地区から構成され、さらに下位区分の地区に分かれる。

19世紀まではヴォー・アン・ヴランはローヌ河の南に位置する小さな農村であったが、しばしば河川の氾濫に悩まされていた。当時の農民が居住していた地区は、現在のヴィラジュに

当たる。1899年になるとヨナジュ運河（Canal de Jonage）が建設され、当時フランス最大のキュセ（Cusset）水力発電所が稼働し始めた。洪水の抑制と電力供給によって、ヴォー・アン・ヴランは工業地域として発展するようになる（Foret, 2010b:6）。

1925年にはジレ家が運河の南に広大な土地を購入し、レーヨンの生産工場を建設した。10年後にこの工場は南東人口繊維会社（Textiles Artificiels du Sud-Est: la TASE）と名を変え、1935年にはすでに約3,000名の従業員を抱えていた（Foret, 2010a:15）。TASEを所有するジレ家は、当時工業地域に建設されていた「田園都市 la cité-jardin」のアイデアをもとに、工場の周辺に従業員向けの巨大な住宅地を建設し、保健医療施設や学校、教会、カフェレストランも建設するなど、従業員の福利厚生を重視した家父長的な経営をおこなった。従業員向けの住宅地には経営者・技術者向けの一軒家（les Petits Cités）から工員向けの集合住宅（les Grands Cités）、女性工員向けの寮が建設された（Foret, 2010b:9）。TASEは数多くの移民労働者を受け入れ、フランス人はもちろんイタリア人、ポーランド人、ロシア人、アルメニア人、スペイン人から始まり、ポルトガル人、アルジェリア人、ベトナム人まで多様な出自の労働者を雇い入れた（Panassier, 2009:7）。工業地域としての発展にともない、ヴォー・アン・ヴランの人口は、1901年の1,251人から1931年の8,105人までに増加した（Panassier, 2009:7）。TASE工場は1980年にジレ家が資本を手放すまで稼働し、フランスのレーヨン生産の中心として発展した。

当時の労働運動の盛り上がりのなかでTASEの労働者も組織化された。1935年には経営側が35%の賃下げを決定したことに反対し、初めてのストライキがおこなわれた。ストの結果145名が解雇され、その多くはイタリア人だったという。その後、1936年には人民戦線、1937年には新しい解雇計画に反対して労働組合が50日間のストライキに入り、ヴォー・アン・ヴランの工場が占拠されることもあった（Foret, 2010a:18）。

1950年代後半には、工場の規模が拡大し、会社は再びポルトガル、イタリア、北アフリカから新たな労働者をリクルートした（Foret, 2010a:21）。ヴォー・アン・ヴランの市議会議員であったマリー＝ギスレーヌ・シャシヌは、当時の工員に聞き取り調査をおこなっている。調査当時70歳を越えたクロードィーヌはこう振り返っている。「16歳で工場に入り、定年までそこにいました。私は糸織りの仕事をしていました。私たちの仕事は、切れやすい糸を見張ることでした。見張っておくスピンドル [糸を紡ぐための軸] は最初それぞれ六つでしたが、そのあとは十二、最後には十八にまで増えました。暑いときでも窓を開けることはできませんでした。風が入り込むと糸が切れるかもしれないからです。悲惨だったとは思わないでください。工夫して楽しんでいましたよ。若かったのです。雰囲気は沈んでいるときは二、三人でトイレに行き、チャールストンを踊っていました。監視員は私たちを見ていましたが、笑っていました」（Chassine, 2008:96-97）。労働条件は過酷ではあったが、にぎやかな雰囲気であったという<sup>2)</sup>。

しかしジレ・グループは、1970年代のオイルショックの影響を受けてTASE工場を手放し、1980年に突然の閉鎖が決まる。反対運動が組織化されたものの、決定は覆らず、一軒家の一部は住民に売却され、集合住宅は社会住宅の事業者（bailleur social）へと売却され、低廉家賃住宅として運営されるようになる（Foret, 2010a:26）。

### 3 非行と郊外の変容

#### 若者の非行から「郊外の若者」まで

ヴォー・アン・ヴランは当初、もとの農村であった北部のヴィラジュと工業地域として発達した南部のソワを中心に発達したが、北部の農村地域は第二次大戦後からしだいに住宅地区として開発されるようになる。とくにアルジェリア独立戦争（1954-1962）を契機に、白人入植者であったピエ・ノワール（Pied Noir）やフランス側として戦ったアルジェリア人であるアルキ（Harki）がフランス本国へと大量に戻り、住宅需要が増加していた。リヨン市内ではラ・デュシェル（la Duchère）やヴォー・アン・ヴラン北部のグラピニエルが1963年に優先都市化区域（ZUP: Zone à urbaniser en priorité）として指定され、1964年から1965年のあいだに13棟640室の社会住宅が建設された。この計画では十年間で8,300室の住宅を建設し、そのうち90%を社会住宅とするというものであった（Pannasier, 2009:8）。その後、経済発展とともに他の地区にも同様の団地群が建設され、現在のような住宅団地群として発展していく。

1971年には最初の暴動と言われる出来事がグラピニエル地区で起こっている。まだ周辺が広い牧草地帯で他の地域から隔離されていたグラピニエルでは、すでに若者たちが車やバイクを乗り回す「ロデオ」と呼ばれる危険行為が広がっており、警察との衝突が初めてこの地区で生じた。その後、1979年にも再び暴動が起こっている。しかし当時は地元の『ル・プログレ（le progrès）』紙が取り上げたものの、全国的な社会問題として広がることはなく、それは70年代までほぼ一貫した傾向であった。1980年代になると、郊外の若者たちによる警察との対決が頻発し、各地で暴動が生じるようになるが、当時の問題化のフレームワークでは、80年代になるまでは郊外の若者たちが注目されることはほとんどなかったのである<sup>3)</sup>。

#### 郊外の変容

リヨン都市郊外が変容した要因としては大きく三つ挙げることができる。第一に、1973年と1979年のオイルショックの影響で失業率が急速に高まったさいに、とくにそれが移民労働者に大きく影響したことである。第二は住宅政策、とくに市場化による持ち家促進政策である。第三は、移民労働者の「家族呼び寄せ」政策である。

まずはリヨン郊外の人口変動について見ておこう。図2は、ヴォー・アン・ヴラン市とヴェニッシュー市の人口の推移である。とくにヴェニッシューでは持ち家促進策が導入された1970年

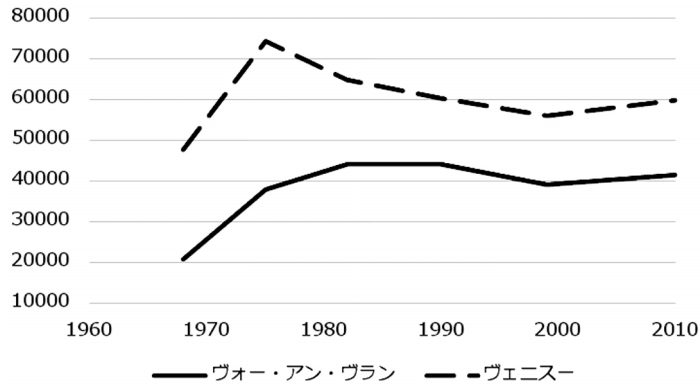


図2 リヨン郊外の人口変動

(出所) INSEE

代後半から急速に人口が減少していることがわかる。ヴォー・アン・ヴランの人口は1968年に20,726人から、1975年には37,866人へと1.8倍増加している。1962年には12,118人だったため3倍以上の増加である。同じ時期、ヴェニッシュューでは1968年が47,613人から1975年の74,347人へと1.56倍の人口増加であった。

最も人口の多かった1975年の国勢調査では、ヴォー・アン・ヴランの全人口のうち外国人人口がすでに28.8%に達しており、リヨン都市圏では最も外国人比率が高くなっている。ヴェニッシュューでは18.8%、高所得層の住む西部地域のエキュリ(Ecully)は4.8%、フランシュヴィル(Francheville)では4.4%に過ぎず、外国人比率は6倍以上の違いがあった(Rochefort, 1977:323)。また小学生の子ども割合になると、ヴォー・アン・ヴランでは外国人の子どもが41%、ヴェニッシュューが23%で、反対にエキュリでは8%、フランシュヴィルでは4%であった(Rochefort, 1977:324)。リヨン東部の郊外人口のうちかなりの部分がすでに外国人・移民で、そのうち子どもの割合が非常に高かったことがわかる。リヨン東部の郊外はこのように他地域よりも外国人比率の高い人口構成のなかで、オイルショックによる影響をより深刻に受け、失業率の増加を経験したのである。

郊外の変容の第二の要因は、住宅政策の変化である。ジスカール・デスタンが大統領であった1977年、当時の住宅省大臣のジャック・バロの改革案は、急速に老朽化した団地群であるグラン・アンサンブル政策にたいする批判を受け、これまでの建物中心の政策から住民中心の支援へと重心を置くものであった<sup>4)</sup>。それは「石(建物)から人(住民)へ」という、より「人間的な」政策を目指したものであった。具体的には、賃貸者への家賃補助に加えて住宅購入予定の低所得者に財政援助をする「個人向け住宅援助(APL: Aide personnalisée au logement)」と持ち家促進ローン(PAP: Prêt d'accèsion à la propriété)」を導入する持ち家促進政策であった。これは住宅の公的な建設よりも、むしろより「市場化」を図る政策でもあった。

1982年になると、ヴェニッシュューの人口は64,804人へと1975年から約1万人の減少、さら

に1990年には60,444人、1999年には56,014人にまで落ち込んでいる。ヴォー・アン・グランの場合は人口の減少傾向はやや遅く始まり、1982年には44,160人から1990年44,174人と停滞し、1999年には39,154人へと減少している（Panassier, 2009:9）。つまりこれらの地域は、高度成長期には人口が急増したものの、オイルショック以降、持ち家促進策などをきっかけとして減少、1981年のヴェニシュー市のマンゲット（Minguettes）地区、1990年のヴォー・アン・グランで暴動が生じたころには、比較的豊かな中間層を中心に人口流出が始まっていたことがわかる。

そのためマンゲットの所在するヴェニシュー市では、1979年12月の時点で空室が1,182室であったのにたいして、約五年後の1985年3月になると2,433室で、約2倍に増加している（Panassier, 2008:34）。1979年には全国で50地区を対象に「住居と社会生活（HVS）」が実験的に導入され、ヴェニシューが選ばれた。そのさい選出基準として、社会住宅の割合、移民人口の割合（25%以上）、未成年者の割合（50%）、そして空室数が挙げられている。

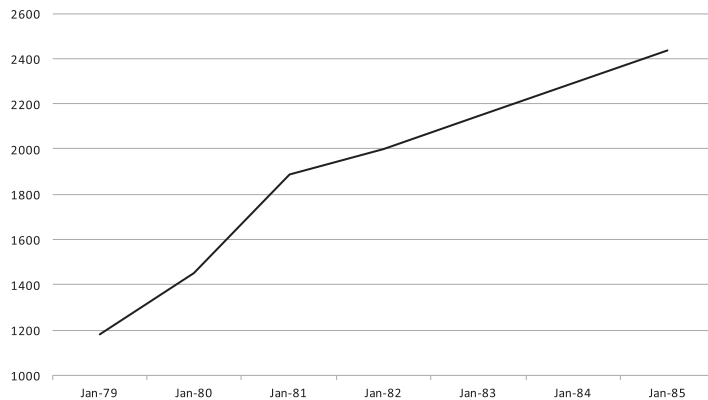


図3 ヴェニシュー市の社会住宅空室数の推移（1979-1985）<sup>5)</sup>

郊外の様相を変化させた第三の要因は、「家族呼び寄せ」策である。まず1972年のマルスラン・フォンタネ（Marcellin-Fontanet）通達で、滞在許可証の発行にさいして労働許可証と住居証明を必要とした。つまりそれまではフランス本土に到着後に労働許可を得れば滞在許可を延長することができたが、それ以後は入国前にすでに労働許可と住居証明の提出が必要とされ、それがない長期滞在は不法とされたのである。第一次オイルショック直後の1974年にジスカル・デスタンが大統領に就いたのち、すぐに労働移民を終了させ、1977年には帰国支援制度も設立した。その一方で、1975年には「移民の家族呼び寄せ法（Le droit au regroupement familial des immigrés）」が成立した。この法律では、フランスに正規居住している外国人労働者が家族と暮らすことを認め、その後その家族は働かないという条件つきで呼び寄せを認めたのである。こうした移民政策の変化は、これまで単独男性が多かった移民が家族を形成することを可能にし、さらにそれによって、二世代の統合問題が生じるきっかけとなった



のである。

このように、オイルショックによる失業者数の増加、持ち家促進策による中間層の流出、家族呼び寄せ政策をつうじて、工業地域として発展した大都市郊外の変容が生じたのである。

### 社会問題の「移民化」

フランソワ・ミッテランが権力の座に着いた1981年の5月10日、ヴェニシュー市のマンゲット地区で大規模な暴動が生じた。郊外暴動は1970年代にもすでに地方紙では取り上げられていたものの、そこでの緊張はおもに少年たちの非行やロデオ、住民間の衝突などであった。1979年にグラピニエルで少年と警官隊との衝突があったが、それまではまだそれが「暴動」として大きく取り上げられることもなかった。しかし1981年になると、すでに4月10日から12日のあいだにイギリスのブリクストンで大規模な暴動が起こり、「黒人暴動」として報道されていたのである（Willaume, 2003:4）。

当時17歳だったモクラネ・ケシ（Mokrane Kessi）は、地区そのものは「連帯的 *solidaire*」であったが、住民は地区外からのイメージに悩まされていたと言う。「ヴェニシューの中心には行きづらいとよく感じていた。二つの地区のあいだには敵意があった。いわば白人の街（*ville*）に対する移民の団地（*cit *）だった」（Moris, 2011）。こうした状況のなかで、しだいに盗難車に乗った暴走行為と放火が相次ぎ、9月の終わりには合計200台の車が燃やされた。そして若者と機動隊（CRS: *Compagnies r publicaines de s curit *）が対決する姿が全国的に報道されることになった。

マンゲットで生じた暴動の報道は、これまでの地方紙での扱いとは違っていた。保守系の全国紙『フィガロ』が取り上げた記事は、若者の非行問題の取り上げかたをこれまでと一変させ、「移民出身の若者（*les jeunes issus de l'immigration*）」を焦点化することになった（Tissot, 2007）。そして新たに「都市社会政策」といわれるさまざまな政策が特定の地区を対象に体系的に実施されていったのである。

暴動のすぐ後には1981年「優先教育区域（ZEP: *Zone d' ducation en priorit *）」が指定された。同年、シュヴァルツ報告「若者の職業的・社会的参入」、1982年ボヌメゾン報告「非行対策：予防、抑止、連帯」、1983年デュブド報告「都市をともに作りなおす」と、職業、非行、都市など幅広い分野での施策が立てつづけに提言されるようになった。このようにマンゲットでの暴動をへて、数々の施策が都市社会政策として位置づけられるようになった。

しかしこのような施策が全国の困難地域で実施されるようになったにもかかわらず、その後も引きつづき各地で暴動や機動隊との対決が頻発するようになる。メディアで大きく取り上げられたのは、1990年にヴォー・アン・ヴランのマ・デュ・トロ（*Mas du Taureau*）で起こった暴動である。警察に追われたバイクが転倒し、トマ・クロディオという若者が死亡したことをきっかけに、三日間にわたる暴動が起こったのである。当時すでにヴォー・アン・ヴランで



は居住者の流出のため団地に空室が増え、ショッピングセンターの商店や大規模スーパーが閉鎖するようになっていた。そのため、市は新たに中央広場をつくり、象徴となる登山タワーのほか図書館をオープンさせ、新たなスタートを切ったその一週間後に生じた暴動であった。

またこの暴動をきっかけとして、都市省が誕生し、はじめて「脆弱地区 (quartier sensible)」という言葉が登場する。この「地区」が問題の焦点に当てられることは、若者や移民それ自体よりもむしろその「集中」に焦点が当てられたことを意味する。都市社会政策という枠組は、「地区」という空間的な単位によって社会問題を捉えることを可能にしたが、そのさい、とくに右派は移民の人口増加とかれらの社会住宅への流入に注目した。そこでは「ヨーロッパ人の世帯が流出し、移民が増加したことが、これらの団地に住む人口を一変させたのだ」と診断し、「エンクレーブは、同化しない人びとと排除の都市計画のあいだの対立から生まれる」と危険視されるようになった (Tissot, 2007:47)。「脆弱地区」というカテゴリーの登場には、社会問題の空間化とともに都市問題のエスニック化がともなうことになった。社会問題は「地区」と「移民」という問題に集約され、指定地区ではさらにスティグマ化が進行していく。そしてその後も郊外での暴動が頻発し、2005年にはパリ郊外で二人の少年が警官に追われて事故死したことがきっかけで、全国規模の暴動に発展したのである。

#### 4 都市布置構造の再編

##### 都心部のリハビリテーションと遺産化 (patrimoinisation)

高度成長期のリオンは郊外で人口増加が起こったのにたいして、都心では人口が流出していった。リオンでは、1960年代からすでにこの人口流出にたいする対策として、「リハビリテーション」策が実施された。リオン市は、1964年にヴェー・リオン (Vieux Lyon) の中核部となるサン・ジャン (Saint-Jean) をフランスで最初の「保存区域 (secteur sauvegardé)」と指定した (Authier, 1997:8)。サン・ジャンはマルロー法 (1962年8月4日法) の法的・財政的措置の枠組で建造物の修復作業がおこなわれ、60年代のなかばから魅力的な地区となり、現在のような観光地として発達した。南に隣接するサン・ジョルジュ (Saint-George) は、当初は絹織物職人が集まる地区であったが、19世紀にはすでに技術開発とともに多くの職人がクロワ・ルスに移転し、衰退していた。1960年代の保存運動においても地区の一部しか保存区域の対象にならず、60年代から70年代のあいだに商業が衰退、人口が三分の一に減少、住宅は老朽化し打ち捨てられた地区となった (Authier, 1997:8)。

しかし1975年になると、新しいタイプの商店が集まり地域外からの客を惹きつけるようになった。建物が改修され、若いカップル、単身者や学生も大量に入居するようになった。郊外の団地に近代的な快適さを求めて地区を離れた旧住民も、持ち家促進策を利用して再び地区に移転するようになった。その後、住居の老朽化と投機的な住宅改修 (リハビリテーション) 対

策として、市が介入を決定する。サン・ジャン保存区域事業の延長、地域団体の要望をきっかけとしたものである。1982年にはサン・ジョルジュとその北に隣接するサン・ポール（Saint-Paul）を対象に住宅改善計画化事業（OPAH: Operation programmée d'amélioration de l'habitat）が始まった。改修された420戸のうち250戸の住宅が民間賃貸だった（Authier, 1997:10）。民間業者は国立住宅改善庁（ANAH: l'Agence nationale pour l'amélioration de l'habitat）からの助成を受けて、一定期間市場よりも安い家賃で住宅を供給した。サン・ジャンの北に位置し保存区域に属する一部は、税制優遇措置を受けて発展し、80年代はヴェー・リヨンの一部として組み込まれることになった。こうしてリヨンの中心部は、ヴェー・リヨンを中核として建物のリハビリテーションがおこなわれ、歴史遺産として保存し観光化することによって再生が試みられたのである。

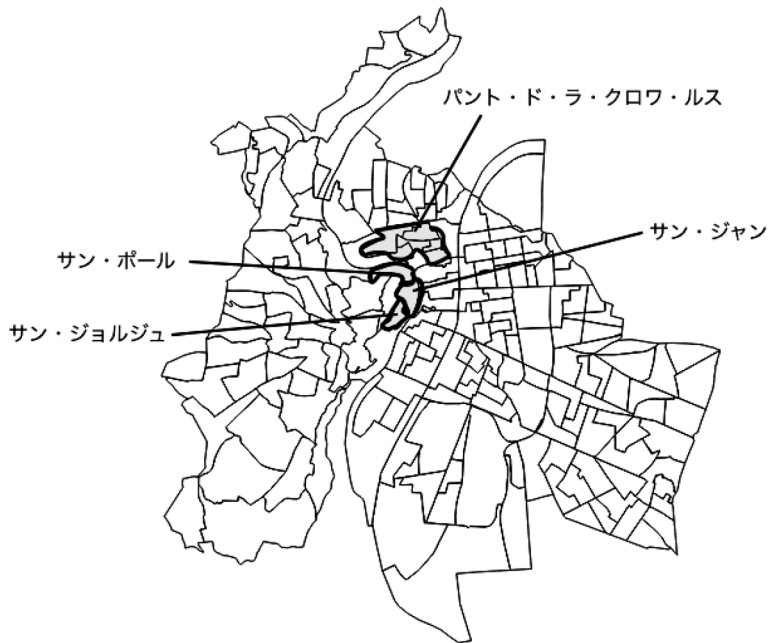


図4 リヨン市地図

#### ジェントリフィケーションと新しい遺産化の試み

かつてのカヌの街として知られるパント・ド・ラ・クロワ・ルス（Pentes de la Croix-Rousse）は、1990年代からの都市社会政策で「脆弱都市区域」（ZUS: Zone urbaine sensible）として指定されるほど、困難を抱える地区として衰退していた。しかしもともと労働者の地区であった経緯から、アナキストなどの活動家の、そして多くのアーティストの活動場所となっていき、地区内にはアーティストックなグラフィティやギャラリーなどが目立つようになった（Collet, 2015）。

一方ヴォー・アン・グランのソワ地区では1980年のTASE工場の閉鎖を受けて失業率が急増し、跡地と周辺住宅地はZUSとして指定され都市社会政策の対象となった。シテTASEはその後市に売却され、社会住宅として使用されている。ソワ地区にはその後、トラムウェイやサンテクジュペリ空港に直結するローヌ急行が敷設され、工場跡地の一部や他の工場は「キャレ・ド・ソワ (Carré de Soie)」という複合センターとして、再開発がおこなわれている。TASE工場の閉鎖後、市民運動が産業遺産として残すことを求め、工場の正面 (façade) が残されるようになった。

#### リノベーションとソーシャル・ミックス

2003年からは新たな都市再生計画「グラン・プロジェ」が始まり、しだいに全国規模で老朽化した団地を解体・再生する「都市リノベーション (rénovation urbaine)」が各地で実施されるようになった (Epstien, 2013)。これは、これまで地区の象徴であったタワー型や箱型の巨大な団地を解体して、より中層の集合住宅を建設することを主な目的としている。この計画は、該当地区では社会住宅の割合を減らすと同時に、豊かな地区にも社会住宅を建設することによって、多様な人びとが共生する「ソーシャル・ミックス」を促進し、地域間の不平等をより小さくしようと試みる対策の一環である。これまでは対象地区を特定するさいに複数の指標を用いていたが、現在では所得のみを基準として「優先地区 (quartier prioritaire)」を指定するよりシンプルなものに変更された。また2012年には新たに「優先安全地区 (ZSP: zone de sécurité prioritaire)」を指定し、非行や治安を重視した地区対策も導入された。さらに、自然環境、衛生、安全など、地域のさまざまな課題を住民間で議論する「地区会議 (conseil de quartier)」や、くじ引きで選ばれた市民が地域の課題を議論する「市民会議 (conseil de citoyen)」が導入され、近隣民主主義 (démocratie de proximité) の促進が図られている。こうした住民参加は、これらの優先地区では極端に他の地区よりも投票率が低いために、さまざまなチャンネルを増やして住民からの意見を汲み取ることを目指したものである。

## 5 おわりに

フランスでは1990年代に大都市における「セグリゲーション」が拡大した。その程度は職業階層ごとに異なり、特定の地区では低所得者層や労働者層が他の階層にくらべてより集中して居住する傾向が高まった。そのためしばしばメディアなどでは郊外の困難地区を「ゲッター」と呼ぶことすらある。これについては研究者のあいだでも論争があるが、郊外の困難地区を対象とした都市社会政策がこうした「ゲッター化」を懸念している側面があるのはたしかである。しかし、こうしたセグリゲーションの大きな要因としてはむしろ、「遠郊外化 (la périurbanisation)」の現象が指摘されている (Charlot et.al., 2013)。つまり管理職や中間職業のような中上流層

の郊外への流出によってセグリゲーションの程度が高まったのである。特定地区のみに焦点をあてるとしばしばこうした「ゲッター化」が問題視されがちになるが、この場合、ある特定の地区と別の地区との関係、あるいは特定の地区と都市全体との関係を捉えるセグリゲーションの分析をおこなうことが困難である。リヨン大都市圏の郊外と都市社会政策の発展を研究するうえで、都市布置構造の変容のプロセスとして、このセグリゲーションを分析することが次の作業課題である。

[注]

- 1) こうした考え方に立つアプローチは近年では「関係社会学」とも呼ばれる (Emirbayer, 1997; Crosseley, 2012)。これはエアラスやブルデュー、さらにはホワイトなどの理論的立場を共通して指すが、英米の社会学ではネットワーク分析の発展とともにこの呼び名が使われるようになった。
- 2) TASE 工場では多種多様な出自の労働者が働いていたが、ここでは労働者間の連帯が存在し、人種差別もなかったという。筆者の聞き取りでも、住民から同様の証言があった。彼女の両親は、スペイン内戦のときにフランスへ難民として逃れ、TASE の工場で働いていた。彼女は「グラン・ダズ (Grand Tase)」と言われる従業員向け集合住宅で生まれ育ち、ソワ地区からカルティエ・エストへと転居したが、この地域では多様な出身の人たちが住み、「差別はなかった」と語る。
- 3) 70 年代以前はむしろ「ブルゾン・ノワール」など労働者階級の若者を中心とした逸脱行動として問題化されており、実際には社会住宅や移民 (とくにヨーロッパ系移民) が多かったものの、重要な要素としては考えられていなかった。
- 4) フランスの住宅援助政策としては他に、子どものいる低所得世帯向けの「家族住宅手当 (ALF: allocation de logement à caractère familial)」(1948 年から) と、若者や学生、子どものいない世帯、高齢者や障がい者世帯向けの「社会住宅手当 (ALS: allocation de logement à caractère social)」(1971 年から) があるが、当初は APL の支給額は他の支援策の額よりも多かった。
- 5) Panassier (2008:34) をもとに加工。

[文献]

- Augustin, M. (2014) *La Marche des Beurs: Des Minguettes à l'Élysée*, CreateSpace.
- Authier, J.-Y. (1997) *Réhabilitation et embourgeoisement des quartiers anciens centraux: étude des formes et des processus de micro-ségrégation dans le quartier Saint-Georges à Lyon*. Ministre de l'équipement, du Logement, des Transports et du Tourism.
- Belmessous, F. (2002) *Le temps des rehabilitations des grands ensembles: pratique architecturale et/ou mode de production urbaine?*, doctorat d'histoire urbaine contemporaine, Université Lumière Lyon 2.
- (2007) “L'émergence du problème des quartiers d'habitat social: une «fenêtre d'opportunité» pour l'agence d'urbanisme de Lyon? (1978-1984)”, *Territoire en mouvement Revue de géographie et aménagement*, vol. 2, pp. 44-56.
- Balazas, G (1991) “La réhabilitation [Entretien avec un locataire de HLM]”, *Actes de la recherche en sciences sociales*. vol. 90, décembre, pp. 77-83.
- Beretti, J. et. al. (1992) “Une typologie des quartiers de dix-neuf grandes villes de l'agglomération lyonnaise”, *Recherches et Prévisions*, no. 29-30, Septembre – décembre pp. 21-30.
- Bier, B. (1996) “À propos d'un entretien avec Khaled Kelkal”, *Agora débats/jeunesses*, 4, 1996. Pédagogie, illusion de la technicité. pp. 75-78.
- Bonneville, M. (1985) “Politique et Pratique d'intervention publique dans les vieux quartiers de Grenoble, Lyon et Sait-Etienne”, *Revue de géographie de Lyon*, vol. 60, n. 3, pp. 259-293.

- Charlot, S. et.al. (2009) “La périurbanisation renforce-t-elle la ségrégation résidentielle urbaine en France?”, *Espace populations sociétés*, vol. 1, pp. 29-44.
- Chassine, M-G. (2008) *La Toile rude de leur dignité*, la passe du vent.
- Cherasse, J.-C. (1981) “Milieu de vie quotidien et perception de l’espace : essai sur des quartiers de la banlieue orientale de Lyon”, *Revue de géographie de Lyon*, vol. 56, no. 1, pp. 29-48.
- Clerget, P. (1929) “Les industries de la soie dans la vallée du Rhone”, *Les Études rhodaniennes*, vol. 5, no. 1, pp. 1-26.
- Collet, A. (2015) *Rester bourgeois: les quartiers populaires, nouveaux chantiers de la distinction*. La découverte.
- Collovald, A. (2001) “Des désordres sociaux à la violence urbaine”, *Actes de la recherche en sciences sociales*, vol. 136-137, novembre. pp. 104-113.
- Crossely, N. (2012) *Towards Relational Sociology*, Routledge.
- Délégation interministérielle à la ville, *Les politique de la ville depuis 1977: Chronologie des dispositifs*.
- Duchene, F. & Morel, J.-C. (2000) “Cités ouvrières et banlieue: la filiation oubliée”, *Géocarrefour*, vol. 75, no. 2, pp. 155-164.
- Duran, N. & Comte, A. (2015) “Quand la croix-rousse était rebelle”, *Tribune de Lyon*, 28/04/2015. <http://www.Tribunedelyon.fr/?actualite/societ/44282-quand-la-croix-rousse-etait-rebelle>. (accessed August 31, 2016)
- Elias, N. & Scotson, J.-L. (1965) *The Established and the outsiders: A Sociological Enquiry into Community Problems*, SAGE. [『定着者と部外者：コミュニティの社会学』法政大学出版社 大平章訳 2009年]
- Emirbayer, M. (1997) “Manifesto for a Relational Sociology”, *The American Journal of Sociology*, vol. 103, no. 2, pp. 281-317.
- Epstein, R. (2013) *la rénovation urbaine: demolition-reconstruction de l’Etat*, Presses de Sciences Po.
- Escafré-Dublet, A. (2008) “Le « problème » de l’immigration”, *la Vie des idées*, 3 octobre 2008. <http://www.laviedesidees.fr/Le-probleme-de-l-immigration,447.html>, (accessed August 31, 2016).
- Foret, C. (2010a) “De l’épopée industrielle de l’Est Lyonnais au projet urbain du Carré de Soie ou l’invention d’un territoire d’agglomération. Brève histoire d’un retour vers le future”, *www.millenaire3.com*, Grand Lyon, novembre 2010. [http://www.millenaire3.com/content/download/1243/16582/version/2/file/Histoire\\_Carre\\_de\\_soie\\_2010\\_01.pdf](http://www.millenaire3.com/content/download/1243/16582/version/2/file/Histoire_Carre_de_soie_2010_01.pdf). (accessed August 31, 2016)
- (2010b) “Carré de Soie: l’esprit des lieux en 10 caractères” *www.millenaire3.com*, Grand Lyon, novembre 2010. [http://www.millenaire3.com/content/download/1243/16582/version/2/file/Histoire\\_Carre\\_de\\_soie\\_2010\\_01.pdf](http://www.millenaire3.com/content/download/1243/16582/version/2/file/Histoire_Carre_de_soie_2010_01.pdf). (accessed August 31, 2016)
- Gilbert, P. (2011) “« Ghetto », « relégation », « effets de quartier ». Critique d’une représentation des cites”, *Métropolitiques*, 9 février 2011. <http://www.metropolitiques.eu/Ghetto-relegation-effets-de.html>. (accessed August 31, 2016)
- Heyaud, E. (2015) *La politique de la ville: une politique de cohésion sociale et territoriale*, Boulogne-Billancourt.
- Klein, J. (1939) “L’industrie française de la rayonne”, *Annales de Géographie*, 48, no. 273, pp. 252-275.
- Knepper, M. (2014) “Tase-en-Velin: naissance d’une ville industrielle”, *Vaulx-en-Velin le journal*, 19 février 2014, no. 88, p. 10.
- Lambert, A. (2013) “Les metamorphose « du » périurbain: Des « petits blancs » aux « immigrés »”, *Savoir/agir*, vol. 2, no. 24, pp. 53-60.
- Loch, D. (1995) “Moi, Khaled Kelkal”, *Le monde*, samedi 7 octobre 1995, p. 10
- Lopez, A. (1992) “Les « quartiers sensibles » de l’agglomération lyonnaise face à la montée du

- chômage”, *Recherches et Prévisions*, no. 29-30, Septembre – décembre, pp. 31-44.
- Moalic-Minnaet, M. (2010) *la révolte de la jeunesse des grands ensembles au cœur des débats politique: De l’offensive des droits à la conversion de la majorité • social-communiste • aux idées sécuritaires (Juin 1981-Juillet 1984)*. Renne: Science Po.
- Mouillard, M. (2012) “L’accession à la propriété des ménages pauvres et modestes”, *La lettre de l’ONPES*, no. 3, mai, 2012.
- Mongniss, A. H. (2014) “abroger la double peine: une lutee contre la discrimination institutionnelle (1989-1992)”, *Les mots sont importants. net*. <http://www.imsi.net/Abroge-la-double-peine>. (accessed August 31, 2016)
- Monod, J., et. al., (2008) “Des Barjots aux bandes des cités”, *Esprit*, vol. 2, pp. 39-54.
- Moris, G. (2011) “1981: “l’été chaud” des Minguettes révèle la problématique banlieue à la France”, *Expressions: les nouvelles de Vénissieux*, 7 juillet 2011.
- Panassier, C. (2008) “Les Minguettes, un marqueur national de la politique de la ville: retour sur les années 1980 et zoom sur la Marche pour l’égalité”, 30/12/2008. <http://www.millenaire3.com/content/view/pdf/1261.pdf>. (accessed August 31, 2016)
- (2009) “Politique de la ville dans le Grand Lyon : l’exemple de Vaulx-en-Velin”, 30/06/2009 [http://www.millenaire3.com/content/download/1285/17418/version/2/file/PolVille\\_Vaulx-en-Velin.pdf](http://www.millenaire3.com/content/download/1285/17418/version/2/file/PolVille_Vaulx-en-Velin.pdf). (accessed August 31, 2016)
- Perret, J. (1937) “Dans la banlieue industrielle de Lyon: Vaulx-en-Velin”, *Les Études rhodaniennes*, vol. 13, no. 1, pp. 23-33.
- Pinton, A. (1936) “ La soie artificielle à Lyon en 1935”, *Les Etudes rhodaniennes*, vol. 12, no. 1, pp. 104-107.
- Rochefort, R. (1970) “Grands ensembles et mutations des banlieues lyonnaises “, *Revue de géographie de Lyon*, vol. 45, no. 2, pp. 201-214.
- (1977) “Les enfants et adolescents dans l’agglomération lyonnaise en 1976: disparités et ségrégations”, *Revue de géographie de Lyon*, vol. 52, no. 4, pp. 319-337.
- Rude, F. (2007) *Les révoltes des canuts, 1831-1834*, La Découverte.
- Tellier, T. (2007) *Le temps des HLM 1945-1975: La saga urbaine des Trente Glorieuses*, Collection Mémoires/Culture, Éditions Autrement.
- (2008) “Les jeunes des ZUP: nouvelle catégorie sociale de l’action publique durant les trente glorieuse?”, *Histoire@Politique*, vol. 1, no. 4, pp. 1-14.
- Tissot, S. (2007) *L’Etat et les quartiers: Genèse d’une catégorie de l’action publique*, Seuil.
- Virginie, L. (1992) “Des Minguettes à Vaulx-en-Velin: les réponses des pouvoirs publics aux violences urbaines”, *Cultures & Conflits* no. 6, pp. 91-111.
- Willaume, J.-B. (2003) *Jeunesse des banlieues et politique de la ville, 1981-1986: Le temps des grandes espérances?*, Université ParisIV-Sorbonne.
- Zanarini-Fournel, M. (2004) “Généalogie des rébellions urbaines en temps de crise (1971-1981), *Vingtième Siècle. Revue d’histoire*, vol. 84, octobre-décembre, pp. 119-127.

# Urban Configuration and ‘Suburbs’ in France :Transformation of Suburbs and Central City Area of Lyon City

KAWANO Eiji

If society is a network of interdependence among individuals and the subject of sociology is in the structure of “relationship” of this interdependence, the analysis of “configuration” in cities is not to analyze individual districts or individuals themselves, but to analyze their interdependence relationship. The research by Norbert Elias and others focused on the relationship between neighboring residents, but the theoretical interest was analysis of the configuration to capture individuals and specific neighborhoods as a whole society. The development of the city is also the process of transformation of the relationship between the residents and their residential areas located in the interdependent network, and in the urban society as a whole.

The characteristic feature of the French cities is the fact that the specific administrative intervention, “politique de la ville”, which was implemented at the national level since the 1980s plays a big role. In this paper, as a preliminary work of analyzing the urban configuration of Lyon, we examine how the structure of urban configuration changed in the course of introduction of urban social policy.